

## フクシマを訪ねて 現地を訪問して思うこと

参加者氏名：石川喜久雄

卒業年：1981年 卒業学部：産業社会学部

東日本大震災から早5年が過ぎた。東京での知事選他諸問題やオリンピックに浮かれた報道が世間を席卷する中、立命館大学校友会のおかげで幸運にもフクシマを訪れる機会を得た。5年前、被災された方へのいたたまれない思いや自分自身への無力感、またこの国の政治や未来に暗澹たる思いにさいなまれたことが、いつの間にかやはり風化しつつある。今、改めて、東北、福島の実実を見ることで、3.11、福島がフクシマになった時への思いを、もう一度胸に刻むべく訪れた。

京都駅から郡山駅までは東京での乗り換えを含めても、車窓風景を楽しむ暇もあまりなくたった4時間で着いてしまった。あまりの高速移動に、リニアや地方への新幹線の整備など人の果てしない便利さへの欲望は、止められないのだろうか、便利さを享受する自分とこのままでよいのかという、ぼんやりとした不安を覚える。

郡山駅で参加者全員バスに乗り、帰宅困難区域の浪江町へ高速道路を移動。安達太良山を教えていただいていると、道路上の放射線量を示す掲示板の数値が、0.2から突然3.6を示す。このホットスポット付近はバイク通行禁止とのこと。しかし、みんな慣れてきていると？。役場に着き、日帰りでの帰還準備をされている副町長さんに商店街を案内していただくも、誰もいない。瓦礫は処分されても、代わりに、田んぼを埋め尽くす除染土のフレコンバックの山。津波被害とはまた違う圧倒的な不気味な世界。映画のセットのような人の気配がない世界というのは、何故か背筋が寒くなる。

目の前に広がる一軒一軒の家の中には、まだ洗濯物が干してあった。ここに住民の皆さんの生活があったのだと思うと、同行した学友達の声もしんみりとなる。役場に掲げてある「つくろう日本一安全・安心なまち」の大きな垂れ幕がむなしい。誰もいなければ、確かに安全・安心ではある。

浪江町は、震度6強の地震と15メートルに及ぶ津波で182名の方がお亡くなりになり、また2万人強の町民すべてが強制避難させられており、長引く避難生活により384名の方が災害関連死されているとお聞きした。

人は、怒りの相手が明らかであれば、がんばろうという気も起きるが、「津波と放射線」という、個人の力ではいかせんともしがたい力に立ち向かうのは、本当に辛く苦しいものだろう。がんばってくださいとは簡単に言えないのだ。

福島県では、3,893人の方が亡くなり、いまだ89,313人の方が避難されている。避難先は県外・県内、概ね半々だ。5年前の164,865人から減少したといっても、まだこれだけの方が、自宅に戻れない。これが先進国なのだろうか。一種の難民ではないのかとも思う。その上、避難者に重くのしかかるのは「差別」だ。「自主避難した人」と「強制避難させられた人」、「県外避難」と「県内避難」、「津波・地震被害の人」と「原発被害の人」などなど。東電からの補償金のあるなしで、同じ仮設住宅に住む人達の間でも嫉妬、ねたみ、軋轢を生んでいると、宿舎での勉強会で中井福島大学長（立命館OB）からお聞きした。

また、県外避難したフクシマの子どもに対しても、避難先の子どもから恐喝や差別があるという。また、宮城県石巻市のことではあるが、大川小学校の裁判など、震災被害者間でも軋轢は続いている。

現地では、またもや震度5の地震も起こった。このような事態が続いているというのに、私が住む関西では、東北への想いは、新幹線の移動時間に反比例してきたかのように思える。京都でも、福井の原発銀座に隣接している中、再稼働の動きが活発になっている。電気代の高騰が家計や企業に与える影響と原発事故が個人や社会に与える影響の大きさは、比べものにならないはずだ。単なる金勘定ではないのだ。インフラ等はまた作れるが、失った命や傷ついた心は元には戻らない。しかし、人や企業は目先の生活におぼれる。

一人一人が、政府や役人にお任せではなく、自分のこととして考えないといけないとは分かっているが、ややこしいことには目を背ける。福島県の校友が、田んぼのフレコンバックを見ながら、私に、「これを見て、経済や生活のため再稼働が必要やなどという奴は、自分の足食ってるタコだべ、政治家は来て、見てみる」と言われた。このフクシマを見れば誰が再稼働を言えよう。言える者は、「我が亡き後に洪水よ来たれ」と思う者だけだなどと思った。

浪江や原発のことを書けば書くほど、気持ちは少しすさんで来るが、やはり、人は前を向いて歩き出す。浪江町の次には、トマトの農業法人を訪問し、取り組みをお聞きした。ビニールハウスの水耕栽培で、またイチエフから距離も離れているので放射線の影響などないが、風評被害が大きく影響したとのこと。

軽トラ1杯のトマトが、段ボール1杯程度の金額に買い叩かれたと。

大学や生協の力も借り、新しい設備や技術の導入で販路を開拓し、風評被害を乗り越えて来てきたと。ただ、私は、風評被害を信じる者も仕方ない面があると思う。事故後、政府によって放射線量の許容量が簡単に10倍になるなど、国民は何を信じればいいのか分からなくなり、自分に都合の悪いことは、理解するどころか聞くことさえも避けてきているのが現状ではないだろうか。

風評被害をなくすなら、農業者もだが、やはり政府自身がフクシマの現状を繰り返し広報し、ダブルスタンダードの説明ではなく誰にもわかりやすい基準値を知らしめる努力をすべきだ。未だ、私も安全？な放射線量がわからない。イチエフから20km離れば、ほとんどの地点の観測量は東京都の地点は変わらないらしいが。しかし、イチエフでは凍土壁は凍らず汚染水タンクも足りず、汚染水は海に流れっぱなしとのこと。湾内でブロックされていると、世界に対して大嘘をついている現状では、残念ながら今のままでは永久に風評被害はなくならないだろう。未来のある子どもの甲状腺ガンの議論も同じと思す。

今後、浪江町を始め、原発立地周辺市町村では避難指示が順次解除され、帰還のための措置は進んで行くことになるだろうが、やはり若年層の帰還は困難を極めると思う。イチエフは廃炉が決定した。規模を縮小した新しいコミュニティの形成に期待したいものだ。

否定的なことばかり書いたが、同行し、お世話いただいた福島県県人会の皆さんの優しい笑顔や未来を語られる姿に救われました。安達太良山に本当の空が戻ってくる日がやってくることを祈ります。

最後になりましたが、2日間にわたりお世話いただき、交流させていただきました福島県交友会の桑原会長、馬場幹事長様を始め、それぞれの分野でご活躍の若い交友の方達、また京都から付き添いいただいた校友会事務局の職員の方に、心からお礼申し上げます。

京都の立命館のOBが暗いことばかり言ってはダメだとと、叱られそうです。夜の交流会のメには、参加者全員で肩を組み、何十年かぶりにグレーター立命を大声で歌わせていただきました。

『未来を信じ未来に生きる』

立命館のOBは、福島を、東北の復興を信じ、これからも応援し続けます。